

経済学は、ドイツでは今日まで外国の科学でしかなかった。…つまり、経済学を育てる土壌がなかったのである。経済学はイギリスとフランスから完成品として輸入された。(原 p19)

1848 年以来、資本主義的生産はドイツで急速に発展し、現在では既にその幻惑の花を咲かせている。しかし、…彼らが経済学を素直に扱うことができた時代は、ドイツの現実には近代的な経済関係は存在しなかった。そして、このような関係が現れたときには、それは、ブルジョアの視界のなかではこの関係のとらわれない研究をもはや許さないような事情のもとで行われたのである。経済学がブルジョア的である限り、すなわち、資本主義の秩序を社会的生産の歴史的に過ぎ去る発展段階としてではなく、反対に社会的生産の絶対的最終形態として考える限り、経済学が科学でありうるのは、ただ、階級闘争がまだ潜在的であるか、または個別的現象としてしか現れていないあいだだけのことなのである。(原 p20)

イギリスを例にとろう。イギリスの古典派経済学は、階級闘争がまだ未発達であった時代に属している。その最後の偉大な代表者であるリカルドは、ついに意識的に、階級的利害の対立、つまり賃金と利潤との対立、利潤と地代との対立を、彼の研究の跳躍点とするのであるが、彼は、(Gegensatz der Klasseninteressen, des Arbeitslohns und des Profits des Profits und der Grundrente)

この対立を素朴に社会的自然法則と考えることによって、そうするのである。

(er diesen Gegensatz naive als gesellschaftliches Naturgesetzes auffasst.)

しかし、またそれと同時に、ブルジョア経済学は、それを越えることができない限界に達してしまっただけである。すでにリカルドの存命中に、そして彼に対立して、ブルジョア経済学に対してはシスモンディという人物の姿をとって批判が立ち向かったのである。

その後、1820 年から 1830 年にかけて、イギリスでは、経済学の領域における科学的活動が注目された。この時期は、リカルドの理論の卑俗化と普及の時期であると同時に、その理論と旧派との争いの時期でもあった。華やかな試合が行われた。そのとき何が行われたかは、大陸では一般にほとんど知られていない。なぜなら、その論戦は、ほとんどの場合、評論の記事、折々の文献や小冊子に散見されるからである。この論戦の偏りのない性格は、リカルドの理論がすでに例外的にブルジョア経済に対する攻撃の武器として役立っているとはいえ、この性格は、当時の事情から説明のつくものである。一方では、大工業そのものがまだその幼年期を抜け出したばかりの時、このことは、1825 年の恐慌によって、初めて大工業がその近代的な生活の周期的循環を開始したという事実によっても既に証明されている。他方、資本と労働との間の階級闘争も、政治的には、神聖同盟の周りに集まった諸政府や諸侯と、ブルジョアジーに率いられた民衆とのあいだの抗争によって、また経済的には産業資本と貴族的土地所有との対抗によって、まだ後方に押しやられていた。このあとの方の対抗は、フランスでは分割地所有と大地主所有との対立の背後に隠れていたが、イギリスでは穀物法以来、あからさまになってきた。この時期のイギリスの経済学文献は、ケネー博士の死後、フランスでの疾風怒濤時代を思い起こさせるが、しかしそれはただ小春日和が春を思い起こさせるようなものである。1830 年、決定的な危機が訪れた。

ブルジョアジーは、フランスとイギリスでは既に政治権力を獲得していた。それ以来、階級闘争は、理論的にも実践的にも、ますます露骨で陰悪な形をとるようになった。それは、科学的ブルジョア経済学の弔鐘 (Totenglocke) を鳴らした。いまや問題は、もはや、これとあれとどちらの定理が正しいかではなく、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合か、反警察的か否かが問題とされるようになった。私利をはなれた研究に代わって金で雇われた喧嘩売りが現れ、とらわれない科学研究に代わって弁護論の無良心と悪意が現れた。しかし、工場主であるコブ

デンやブライトに率いられた反穀物法同盟が世間にまき散らしたあつかましいパンフレットでさえ、決して科学的ではないにしても、地主貴族に対するその攻撃によって、歴史的な関心と呼んだ。この最後の棘をさえも、ロバート・ピール卿以来の自由貿易立法は、俗流経済学から抜き去ってしまったのである。

1848 年の大陸の革命は、イギリスにもはね返ってきた。まだ何らかの科学的立場を主張し、支配階級の単なる詭弁家や追従者以上のものであろうとした人々は、資本の経済学を、もはや無視できなくなったプロレタリアートの要求と調和させようとした。それ故に、ジョン・スチュアート・ミルによって最もよく代表されているような無気力な折衷主義が現れたのである。これこそは、「ブルジョア」経済学の破産宣言であり、それは、ロシアの偉大な学者であり批評家である N. チェルヌイシェフスキーがその著『ミルによる政治経済学概説』の中で既にみごとに明らかにしているものである。

こうして、フランスとイギリスでは資本主義的生産様式の敵対的性格が既に歴史的な諸闘争によって騒々しく露呈された後に、ドイツではこの生産様式が成熟に達したのであるが、そのとき既に、ドイツのプロレタリアートは、ドイツのブルジョアジーよりもはるかに明確な理論的階級意識をもっていたのである。こうして、ブルジョア経済学がドイツでようやく可能になるかに思われた時、それはすでに再び不可能になってしまったのである。

こうして、ドイツ社会の特有な歴史的発展は、この国において、「ブルジョア」経済学の独創的な育成をすべて排除したのであるが、しかしそれに対する批判は排除しなかったのである。およそこのような批判が 1 つの階級を代表する限り、それは、ただ、資本主義的生産様式の変革と諸階級の最終的廃止とを自分の歴史的使命とする階級、すなわちプロレタリアートだけを代表することができるのである。(p18)

『資本論』の優れたロシア語訳が、1872 年の春に出版された。3,000 部という部数は、すでにほとんど売り切れている。1871 年にはすでに、キエフ大学の政治経済学の教授である N・ジーベルが、その著作『デイヴィッド・リカルドの価値及び資本に関する理論』の中で、私の価値、貨幣、資本の理論は、その根本において、スミスとリカルド学説の必然的発展であることを、論証した。この優れた著作を読んで西ヨーロッパ人を驚かせたのは、著者が純粋に理論的な立場を一貫して堅持していることであつた。

『資本論』で採用された方法がほとんど理解されていないことは、それについて形成された、互いに矛盾するさまざまな概念によって示されている。・・・『資本論』の方法について・・・

サンクトペテルブルグの『ヨーロッパ通信』は、『資本論』の方法だけを扱った記事(1872 年 5 月号、427-436 頁)で、私の研究方法は厳密に実在論的であるが、叙述方法は、残念ながらドイツ的弁証法的である、ということを見出している。同誌は次のように言っている。

「叙述の外形から判断すれば、一見、マルクスは最大の観念論哲学者であり、しかも、この語のドイツ的な意味で、つまり悪い意味で、そうなのである。しかし、実のところ、彼は、経済学批判の仕事において、彼の先達の誰よりも、限りなく現実的(Realist)である。彼は決して観念論者(Idealisten)とは呼べない」。私は、ロシア語の原文にアクセスできない読者のために、彼自身の批評からのいくつかの抜粋を提供する以外に、この作家に答えることはできないだろう。

・(p20) 私の『政治経済学批判』ベルリン、1859 年、11-13 頁の序文からの引用で、私の方法の唯物論的基礎を論じた後、この作家は次のように続ける。

「マルクスにとって重要なことは、彼が研究している諸現象の法則を発見することである。・・・彼にとってさらに重要なのは、諸現象の変化や発展の法則、すなわち、ある形態から他の形態へ

の移行、関連の1つの秩序から他の秩序への移行の法則なのである。この法則をいったん発見すると、彼は、この法則が社会生活において現れる諸結果を詳細に調査する。…厳密な科学研究によって、社会的諸関係の特定の諸秩序の必要性を論証し、彼のために出発点及び支点として役立つ諸事実を可能な限り欠陥なく確定するというだけである。このためには、彼が現在の秩序が必然性を論証すると同時に、この秩序が不可避免的に、即ち、人間がそれを信じるか信じないか、それを意識するかしないかには少しもかわることなく、移行せざるを得ない他の一秩序の必然性を論証すれば、それで全く充分なのである。マルクスは、社会の運動を1つの自然史的過程とみなしており、この過程を導く諸法則は、人間の意志や意識や意図から独立しているだけではなく、むしろ逆に、人間の意欲や意識や意図を規定するものだと考えている。…もし意識的要素が文化の歴史で果たす役割が、このように従属的なものだとすれば、文化そのものを対象とする批判は、他の何にもまして、意識のいかなる形態、あるいはいかなる結果も、その基礎とすることはできないということは自明である。即ち、この批判のためには、観念ではなく、ただ外部の現象だけが出発点として役立つことができるのである。批判は、ある事実を、観念とではなく、他の事実と比較対照することに限られるであろう。この批判にとっては、ただ、両方の事実ができるだけ精確に研究されて、現実により一方が他方に対して違った発展契機をなしているということだけが重要なのであるが、なかでもとりわけ重要なことは、それに劣らず精確に、諸秩序の系列が探求されるということである。しかし、ある人は言うであろう。経済生活の一般的な諸法則は同一のものであって、人がそれを現在に適用するか過去に適用するかには何の関わりもないのだ、と。これこそ、まさにマルクスの否定するところである。彼によれば、そのような抽象的な法則は存在しないのである。…彼の考えでは、それとは反対に、歴史上のそれぞれの時代がそれぞれの固有の諸法則を持っているのである。…生命は、与えられた1つの発展期間を過ぎてしまつて、与えられた一段階から他の段階に移れば、別の諸法則によって導かれるようになる。簡単に言えば、経済生活は、生物学の他の諸領域での発展史に似た現象を、我々に示しているのである。…古い経済学者たちは、経済諸法則の性質を誤解していたので、これを物理学や化学の諸法則になぞらえたのである。…諸現象のもっと深い分析は、いろいろな動植物有機体と同様に社会的諸有機体も互いに根本的に違ったものであることを証明した。…実際、これらの諸有機体の全体構造の相違、その個々の器官の差異、これらの器官が機能する諸条件の相違などによって、同一の現象が全く違った法則に従うことになるのである。例えば、マルクスは、すべての時代、すべての所を通じて人口法則が同じだということを否定する。反対に、彼は、それぞれの発展段階にはそれぞれの固有の人口法則があるということを確言する。…生産力の発展が違つて、諸関係もそれを規制する諸法則も変わってくる。マルクスは、このような観点から、資本主義経済秩序を探究し説明するという目標を立てることによって、ただ、経済生活の精確な研究がどれでも持っていなければならない目標を、厳密に科学的に定式化しているだけなのである。…このような研究の科学的価値は、ある1つの与えられた社会的有機体の発生、存在、発展、死滅を規制し、また他のより高い有機体とそれとの交替を規制する特殊な諸法則を解明することにある。そして、このような価値を、マルクスの著書は実際に持っているのである。」この筆者は、彼が私の現実的方法と呼ぶものを、このように的確に、そして私個人によるこの方法の適用に関する限りでは、このように好意的に、述べているのであるが、これによって彼が述べたのは、弁証法的方法以外の何であろうか？

もちろん、叙述の仕方は、形式上、研究の仕方とは区別されなければならない。研究は、素材を細部にわたってわがものとし、素材のさまざまな発展形態を分析し、これらの発展形態の内的な

紐帯を探り出さなければならない。この仕事をすっかりすませてから、初めて、現実の運動をそれに応じて叙述することができるのである。これがうまくいって、素材の生命が観念的に反映することになれば、まるで先験的な（a priori）構成がなされているかのように見えるかもしれないのである。

私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのものとは異なっているだけでなく、その正反対である。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに、一つの独立した主体にさえ転化させている思考過程が、現実的なものの創造者なのであって、現実的なものはただその外的現象をなしているに過ぎないのである。これに対して、私の場合には、観念的なものは、物質的なものが人間の頭の中で転換され翻訳されたものにほかならないのである。

ヘーゲル弁証法の神秘的な側面を、私は 30 年近く前に、まだそれが流行していた時に、批判した。ところが、ちょうど私が『資本論』の第一巻の仕上げに取り組んでいた頃、いまドイツの知識階級のあいだで大言壮語している不愉快で不遜で無能な垂流が、ヘーゲルを、ちょうどレッシングの時代に勇敢なモーゼス・メンデルスゾーンがスピノザを取り扱ったように、すなわち、「死んだ犬」として取り扱っていい気になっていたのである。それゆえ、私は自分があの偉大な思想家の弟子であることを率直に認め、また価値論に関する章のあちこちでは、彼に特有な表現様式に媚びを呈しさえしたのである。弁証法がヘーゲルの手のなかで受けた神秘化は、彼が弁証法の一般的な諸運動形態をはじめて包括的で意識的な仕方ですべてということを妨げるものではない。弁証法はヘーゲルにあっては頭で立っている。神秘的な外皮の中に合理的な核心を発見する為には、それをひっくり返さなければならないのである。

神秘化された形態では、弁証法はドイツで流行した。というのは、それが現状を光明で満たすように見えたからである。その合理的な形態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者たちにとって腹立たしいものであり、恐ろしいものである。なぜならば、それは、現状の肯定的理解のうちに同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、いっさいの生成した形態を運動の流れの中で捉え、従ってまたその過ぎ去る面から捉え、なにものにも動かされることなく、その本質上批判的であり、革命的であるからである。

資本主義社会の矛盾に満ちた運動は、実際のブルジョアには、近代産業が通過する周期的循環の局面転換のなかで最も痛切に感ぜられるのであって、この局面転換の頂点こそが、一般的恐慌なのである。この一般的恐慌は、まだ前段階にあるとはいえ、再び進行しつつあり、その舞台の全面性によって、その作用の強さによっても、新しい神聖プロイセンドイツ帝国の成り上がり者達の頭にさえ弁証法を叩き込むであろう。

ロンドン、1873 年 1 月 24 日

カール・マルクス

2025/01/24 記